

高相研だより～POLE STAR～

NO.2 令和5年1月19日 北海道高等学校教育相談研究会広報部発行



令和4年11月9日（水）、北海道科学大学高等学校において、令和4年度北海道高等学校教育相談研究会 第2回研究協議会 兼 石狩地区研修会を開催しました。参加される方の希望に沿って、対面とオンラインの両方の形式で開催しました。当日の議事録・記録等に基づき、報告します。

実践発表・研究協議会「自校での取り組み事例について」 札幌南陵高等学校 養護教諭 安川愛莉

＜実践発表記録＞ ※紙面の都合上、一部の内容について記載させていただきます。

【生理用品無料配布】

令和3年4月から家庭の事情等により必要な生理用品の入手が難しい女子生徒を父母と教師の会で支援している。良かった点は、生徒の悩みに寄り添い、間接的に授業参加への支援となったことである。課題は、学校の配布物に頼ることで生理周期を把握しない・生理用品を準備しない等、自己管理能力の低下が不安視される部分である。

【教育相談～SCとの連携～】

友人関係や家庭環境に悩む生徒が多い。SCによるカウンセリングを希望する生徒は、継続が多く新規が少ないため、上手く活用できていないと感じる。相談を勧めても、何を相談したらいいかわからないと答える人がいる。

生徒がカウンセリングを受けた場合、担任がSCから直接助言をもらう時間を設けたいが、授業・講習や部活動と重なり時間を確保できず、養護教諭が内容を聞いて紙面にまとめ、後日伝えている。

＜研究協議＞

自校の課題となるSCの情報（助言内容）共有の方法と対象者の決め方について、各学校から意見を出していただいた。

＜感想＞

今回いただいた意見を参考にし、学校の実情に合わせSCとの連携ができるよう、課題解決に向けて頑張りたいと思う。

講演 「各種検査の特徴や活用方法」 北海道立特別支援教育センター 研究員 迎 晶子

＜概要＞

令和3年度の道教委調査では、義務教育段階で特別支援学級に在籍していた生徒のうち、高校学校等（高等専門学校、専修学校を含む）への進学を希望するケースが40.3%あるとされており、高等学校等においても特別な教育的支援を必要とする生徒が在籍する可能性があることから、障がいのある生徒の指導や支援に関する基本的な知識や技能を身に付けることが教員に求められている。このような背景から、今回の講演では、子どもがもつ強い面や得意な面を効果的な支援につなげていくことについて、教えていただきました。

心理検査を行う場合は、まず、子どもや保護者に相談内容（主訴）を確認し、情報を整理する。次に複数の検査結果を比較したり、量的情報と質的情報との食い違いを検討したりし、最後に情報を整理・統合して支援の方策を計画する。その際は、子どもの長所やよさを生かすという視点が大切で、心理検査を行う前に検査結果を通して何を知りたいのか、何が明確になるのかを本人、保護者に丁寧に説明をする必要がある。本人や保護者は、不安な気持ちを抱えている可能性があるため、ここでの説明がとても大切である。なお、教師側は、心理検査を勧めるだけでなく心理検査後の取組も考え、学校全体で体制を整える必要がある。

心理検査の結果は、その時々コンディションの影響や個人差があるため、あくまでも検査を行った時点での子どもの状態となる。またFSIQだけで子どもの全体像をとらえることは、避けなければならない。検査は手掛かりのひとつと捉えること、検査結果でわかった子どもの長所について本人、保護者や学校と共通理解を図り、具体的な支援について子どもを中心としたチームで考えること、検査結果に疑問がある場合はそのままにせず検査者に尋ねることが大切である。

学級経営では、個別に支援が必要な生徒への関わりばかりを重視しすぎると、全体への指導が疎かになり、学級全体が不安定になる。全体に配慮した環境をつくることで、集中して学習に参加できる生徒が増え、個別な支援が必要な生徒を減らすことができる。

検査を行うには、子どもにその目的を説明し、子どもが主体的に相談する気持ちになることが大切であり、その気持ちがない場合、有効な検査にならないかもしれない。子どもが自分の得意な面や不得意な面を知り、どうしたら助けてもらえるのか、どうしたら学びやすくなるのか、また、得意な面をどのように活用するのかなどを子どもと一緒に考えていくことが大切である。

＜感想＞

検査をして終わりにせず、チームでの結果の共有と子ども・保護者の意向に沿うことが大切だと思いました。

【編集後記】多くの方々にご参加いただきありがとうございました。

お気づきの点などがございましたら、広報部までご連絡ください。（広報部：北海道札幌南陵高等学校 安川 愛莉）